

# 月報

<440号>

ケルン・ボン日本語  
キリスト教会  
二〇一八年三月二十五日発行

## 『主よ、ともに宿りませ』

佐々木 良子

日暮れて やみはせまり、  
わがゆくて なお遠し 助けなき身の頼る  
主よ、ともに宿りませ

いのちの 終わりちかく、世の栄え  
うつりゆく とこしえに 変わらざる  
主よ、ともに宿りませ

（讃美歌二一・二一八番より）

タバの祈りと言われ、作詞者は、ヘンリー・フランシス・ライト（一七九三〜一八四七）という英国教会の小さな漁村の教会に生涯仕えていた牧師でした。病弱であった彼は病気が悪化したので、転地療養のためにその漁村を離れようと、力を振り絞って最後の説教壇に立ちました。その後、療養先のイタリヤに向かう途中で、死を迎え五四歳で亡くなりました。この讃美歌はその最後の説教前に書かれたものです。命の終わりを感ずる時、世の闇路が迫って来る時、どうか私と共に、寂しいこの魂と共にとどまってください。という意味があるようです。英語圏では葬儀の時には必ず歌われる讃美歌と言われています。

この讃美歌は私の中でも印象深い讃美歌です。昨年のイースターに、思い立ってケルン大聖堂で執り行われていたミサに行きました。カトリック

です。で礼拝の形式などの違いはありますが、それほど違和感はありませんでした。しかし初めて一人に参加したミサ、廻りの人は誰一人知らない、まして全てがドイツ語、当たり前ですが・・・。何となく疎外感を覚えていた時、最後に日本でも賛美されているこの讃美歌が流れました。人種・宗派を超えて共にいてくださる主と一緒に見上げる喜びを実感したひとコマで、心がほっこりして帰路につくことができました。

又、つい先日ですが、二月にイスラエルに行く機会が与えられました。主イエスと弟子たちが歩いたであろうと言われているエマオ途上の道を歩き、聖書に耳を傾け賛美しました。不信仰な弟子たちを責めることなく寄り添って歩いてくださった主イエスの憐みと愛に触れ、あの有名なルオーの絵画の中に私も一緒に歩ませて頂いているような思いになりました。

さて前置きが長くなりました。この讃美歌が書かれた背景は、このようにエマオの途上の弟子たちと私たちを重ねて作られています。（ルカによる福音書二四章一三〜三一節）

「ちょうどこの日、二人の弟子が、エルサレムから六十スタディオン離れたエマオという村へ向かって歩きながら、この一切の出来事について話し合っていた。」（一三〜一四節）と記されています。主イエスが十字架に架けられ墓に葬られた後、二人の弟子たちは失望して、顔は暗く、言葉もなくエルサレムからエマオという村へ向かって歩いていました。の様子です。

自分たちが信賴していた教師であった主イエスは、イスラエルを救うメシアであると信じていましたが、十字架に架かって死んでしまい、かつて一緒に歩んでくださった主イエスはもうおられない。自

分たしれない。全てが夢のように終わってしまった。そのような落胆の中になりました。そして、また主イエスと出会う前の暮らしに戻すために、彼らは神の都エルサレムから離れていく、つまり神様の宮から離れていく途上でした。それは神様から離れていくということです。自分たちの期待は打ち破られ、彼らの落胆が暗い道を造りだしてしまいました。

しかし、復活の主イエスはそのような彼らに近づきその暗き道を共に歩まれていたのです。その主イエスに気付かないほど、彼らの目はさえぎられ、暗い闇しか見えていなかったのです。

そのような彼らの闇の深さを見る時、私たちもまたこの現実世界の闇の深さ、また人生において遭遇する自身の闇の深さを思います。救いの手は差し伸べられているのに、それに気付かないほどの闇の深さに絶望します。目の前の事実にとらわれるなら、この闇は闇のままです。私たちは理想や願望を追い求めれば求めるほど、挫折や裏切りにあつたとき、目の前は真っ暗闇に覆われてしまいます。いつの時代もエマオの途上を歩くような私たちに寄り添ってくださいている主イエスです。人生何度も夕暮れを感じ、迫る夕闇に不安を持ち、思わずイエスさまに「とどまってください。離れないでください」と言える私たちは、何と幸いでしょっか。

この讃美歌の作詞者、ヘンリー・フランシス・ライト牧師は、一生涯病との闘いでしたが、その苦しみの中でいつも寄り添ってくださる主イエスの助けを祈る姿に廻りの人々は励まされ、力を頂いたことでしょう。失望し暗闇の中にある時、「ともにいてください！」と、弱さと向き合いながら復活の主と共に歩み続けていきたいです。

## ケルン・ボン日本語キリスト教会をお訪ねして

佐々木良子宣教師を支える会 物井恵一

主の御名を褒むべきかな。この度、ケルン・ボン日本語キリスト教会(ケルン・ボン教会)を訪問し、礼拝を共にささげ、良きお交わりができましたことを主に在って心から感謝いたします。

東京の東に位置する江戸川区北葛西にある日本基督教団小松川教会の前任牧師でありました佐々木良子先生が二〇一六年四月よりドイツ・ケルンの地で宣教活動をなさると伺い、佐々木良子宣教師を支える会(支える会)を立ち上げることになり、実行委員会を組織しました。二〇一五年秋から、準備をはじめ、二〇一六年一月の宣教派遣式を以って支える会の活動を開始しました。当初は神様の助けを祈りながらも、多くの方に支援をアピールしましたが、ゼロからのスタートでしたから正直、四月の第一回送金が贈えるか、毎月の支援金をきちんと送金できるか、不安でした。しかし、主がなさることには不足はなしと信じて祈りつつ、皆さまに支援の願いをいたしました。まずは小松川教会員が受付に置いた支える会月定献金袋を用いて八〇名程が賛同してくださり骨格を作ってくれました。感謝感激でした。その上で佐々木良子先生のこれまでのホーリーネスの群の派遣先の働き、日本キリスト伝道会の働き、教団の教区支区の重要な役割、地方への礼拝、研修会の働き等で良き交わりのあった先生、信徒の個人教会が支援して頂くようになり、特に小塩節・トシ子先生ご夫妻(節先生の癒しのため祈っています)が井草教会の多くの方に声をかけてくださり、佐々木先生の幼少の頃通った洗足教会では牛山輝代姉が良き働きをしてくださっています。教会によって個人単独ではなく、小松川教会と同様に有志の方々が責任者を決めて取り纏めて送金してくださ

っています。その結果、この二年間、今日まで、毎月の支援金を滞りなく、お届けできていくことに主に感謝をささげます。このように途切れることなく継続して支援献金を捧げてくださる理由として、ケルン・ボン教会の方が佐々木牧師を物心両面で支えてくださっていることや佐々木牧師自身の宣教活動の現況をニュースレターや支える会ホームページ、ケルン・ボン教会フェイスブックなどで知られていることも一因だと思います。しかし、支える会から現地に向き、直接見てきて欲しいという声もありました。佐々木先生の御教会就任式には佐々木警兄(現在 神学生)が出席しましたが私自身も責任者として、一度訪問するのが望ましいと思っていました。仕事や教会、教団の奉仕スケジュールの関係や海外旅行は二〇年数年ぶりということもあり躊躇していました。今回、佐々木先生はじめ役員の皆様のご配慮でチャンスを与えていただき、思い切った貴教会を訪問させて頂きました。

一月二四日にテュッセルドルフの藤井隼人役員にお迎え頂き、一泊させていただきました。現役時代何度かビジネスで渡独しましたが、ご家庭に招かれ、宿泊させて頂いたことは初めてでした。翌朝の食事時にはテポーションのときを持ちました。藤井隼人・弘子ご夫妻の日記の聖書の輪読(創世記、私はアパルムその日の箇所(静思の時)を読み、共に祈ることの素晴らしさを主は味わせてくださいました。一月二八日の主日はドレーア京子姉の車で佐々木師と同乗し、ケルン・ボン教会に行きました。早速皆さんがお声をかけて下さり歓迎してくださいました。当日は新たに第四主日に企画された「大人と子どもの合同賛美礼拝」で、藤井隼人兄と張谷延河兄がプロジェクターの準備を、奏楽を藤井千恵姉がなさいました。生憎、子供連れの方は出席できませんでしたがコンキアとカレブのアニメ物

語を投影し、佐々木良子先生の優しい説明の中から御言葉を取次いで頂きました。また、プログラムにはいつもの礼拝より沢山の讚美歌が組まれ、皆で心から賛美できたことは嬉しい限りです。共に主を崇め、み言葉に耳を傾け、一つとなって賛美ができたことは感激でした。礼拝後は別室で皆様の手作りのカレーライスとお料理を堪能し、ウィットに富んだ自己紹介を頂き、お顔を覚えるのに助けになりました。私からは支える会の概要をお話しさせて頂きました。小松川教会の書道家、石井泰子姉の色紙をプレゼントさせて頂きました。皆様とお会いし、ケルン・ボン教会の教会形成の実際を拝見できましたことは感謝でした。また、皆様で役割を分担して、牧師を支え、教会の宣教活動が滞ることなく生き生きとなされていることを確信し、支える会として継続して交流をもつ意義を改めて噛み締めました。

「今日こそ主の御業の日、今日を喜び祝い、喜び踊らう」(詩編一一八編二四節)

佐々木良子先生はこの二年間でドイツに馴染んでこられた様子がよく分かりました。信徒の方が語ってくれました。一 聖書を学ぶ会を夜から昼に代え、出やすく工夫をしたり、初心者への聖書の学び入門編を設けたり、未信者の若い主婦のニーズを捉えて教会へ近づきやすいように「ママの子育ての学び会」を牧師宅で始めました。まだ、種を蒔いたばかりなので、これから成果が出てくると思いますよ。楽しみですよ。

教会員の皆様が一致して先生と共に歩み、支える喜びを示してくださいました。今回、佐々木先生の赴任一年半で既に任期更新を決議されたとお知らせを受け、現地に立ち、さもありませんと納得いたしました。支える会実行委員会も引き続き、支援を継続することを確認し、今後、支える会会員の方、特

別に支援して下さる方にアピールしていくことになりました。まずは支える会「ユースレター四号」にこれまでの支援の感謝と三年延長の支援を継続的にお願いすることにいたしました。ただ、三年のお約束で当初支援をお願いいたしましたので、長期になることに対して主に祈りつつ、より一層アピールしていく必要があると考えています。どうか支える会の会員の方のため、実行委員のためにもお祈りをお願いいたします。

この機会にイスラエルに一週間、聖地旅行を佐々木先生、藤井隼人兄と出かけ、多くの信仰的な収穫を得ることが出来ました。ケルンに戻り、シュミット亜弥子役員のお宅に二泊させて頂き、朝のデボーションではローズンゲンで一日を整えてくださり、来宅された佐藤グルーベ道子姉手製のデザートを頂戴し、佐々木先生と四人で会食して、良きお交わりの時を持ちました。またこの間に旅の疲れが癒され、本当に皆様のご親切に心から感謝いたします。

ケルンボン教会のこれからの歩みに主が豊かな祝福と恵を注いで下さるよう、お祈りいたします。

「味わい、見よ、主の恵み深さを。いかに幸いなことか、御もとに身を寄せる人は。」(詩編三四編九節)

インタビュー

伊藤ザッセ恵子

月に一度、佐々木先生の都合が付く際に時間を設けてくださり、ケルンに在住の日本人の母親が数名集まり、先生と一緒に子育てについて語り合っ、『子育て教室』を自宅にて開いてくださっています。

お茶を飲みながらいい雰囲気の中での教室。子供の年齢も母親の年齢も様々ですが、皆が母親としての立場から発言！という事で、色々な意見を聞きながら、交換しながら、『子育てとは、……』というテーマについて考える時間です。



今は、インターネットで、ばんっぽんと『子育て』と、キーボードを押せば、情報がうわーっとこれでもかと溢れ出す世の中ですが、やはりこのように直接会って、生の声を聞きながら、子育ての壁にぶち当たった時の悩みや疑問点、もしくは逆に良かったことの体験談などの話を、お互い気楽に語り合っ機会が、しかも日本語で思う存分語ることができるこの時間はとても貴重な時間。

ドイツ人ママ達とは、考え方や価値観や習慣の違いで、やはりどこかかみ合わなかったり、(私の場合、言葉の壁もありますが、)解決策が見つからず、もやもやしたりすることも多いのですが、ここで思う存分、語れることで気持ちに余裕が生まれまします。そして、いつも帰るころには、ポジティブシンキングになっている自分がいまいます。『今日もいい話が聞けたな、これを参考にしてみよう』と。

いつも笑顔で、お元気で、はつらつとしていらっしやる佐々木先生、これからも色々なお話を聞かせてください、私たちが、母親として子供と一緒に大きくなる為の温かいアドバイスをお願いします！

ファミリーコンサートに参加して

岡本 清良

「がんばるぞ〜。今日は、教会で「きよしこのよる」を演奏する日です。たくさんのお客さんが、お花みたいな笑顔で座っていました。」

「1, 2, 3, はい。」私は、茶色のオルガンを弾き始めました。同時に、ピアノとたて笛の音も重なりました。みんなでスムーズに、2番、3番と演奏が進みました。「パチパチパチパチ。」

大きな拍手がなりました。うまくいって、とてもうれしかったです。

岡本 典子

月に一度の子供礼拝でお世話になっている娘が、ファミリーコンサートでオルガンを弾くと言ってお話をいただいた時、楽しみ以上に心配でした。というのも、ピアノを習い始めて半年でまだ音符も読めない上、一人で好きなように弾くのではない合奏、成功のイメージがどうしても出来なかったからです。唯一の救いは、本人のみなざるゆる気。なんとかこれを一か月キープして毎日練習はしたものの、七歳児にどこまで期待できるものやら。

当日は、言わずもがな皆さんの演奏が素晴らしく、驚きの連続でした。ピアノの方のピアノが加わると、家で練習していたあの単調な



「きよしこのよる」がこんなに色鮮やかになるとは、更にオペラ歌手の方の歌声がキラキラ輝き、そのプロの演奏に縦笛が可愛く装飾し、娘も何とか上手く溶け込み、とても微笑ましい「きよしこのよる」でした。

続くプロの奏者の演奏は、ピアノ、ヴィオラ、オーボエ、歌、どれをとっても迫力が違いました。普通なら舞台と客席との距離で感動する演奏を、同じ高さで呼吸ですら聞こえてきそうな距離で聞かせて頂いたものだから、とにかく音が圧巻で、空気が素敵で、私のつたない語彙力で表現できない感動でした。

最後に急ぎよ、「きよしこのよる」を出演者総出で演奏し、観客もみんな歌ったのですが、あの場所にいる全員がこの時間を楽しんでいるのが感じられ、とても幸せな気持ちになりました。そんな素敵な演奏に参加させていただいた娘はもちろんの事、一観客である私にとってもあまりの貴重な体験に、興奮でその夜の夜はなかなか寝られませんでした。この機会を授かったこと、「感謝」の一言につきます。心から、有難うございました。

◇ 報 告 ◇

◇前回もお知らせいたしましたように、二〇一八年の月報は三・六・九・一二月に合併号として年四回の発行となります。これからも引き続きお読みください。

◇一月一六日(火)、日本基督教団の世界宣教委員会総監事の加藤誠牧師が訪問され、佐々木牧師と藤井隼人兄・弘子姉と共に世界宣教の話の伺いよい時を持ちました。尚、一七日は急遽役員を中心にシムミット亜弥子姉宅において家庭集会を開き、しばしの時御言葉に耳を傾け祈りの時を持ちました。

◇一月三日(火)、佐々木牧師とシムミット亜弥子姉が Sressefest の打ち合わせ会に出席しました。今年度はカトリック教会が主催となり会場も変わります。

◇一月二六日(日)は、日本より「佐々木良子牧師を支える会」の会長である物井恵一兄が訪問され、共に礼拝を捧げることができました。礼拝後、懇談の時を持ち教会の様子を知って頂き感謝でした。

◇一月三〇日～二月六日、佐々木牧師、藤井隼人兄、物井恵一兄が、フランクフルト教会主催のイスラエルパスターツアーに参加し、沢山の恵みを頂いて無事戻りました。なお、牧師旅行期間中の二月四日の聖日礼拝は、浅野康牧師 (Bible & Worship Stuttgart) が説教のご奉仕をしてくださいました。

◇佐々木牧師は、三月一日から二八日まで宣教報告のために日本に一時帰国いたしました。今年も多くの教会が受け入れてくださり心から感謝申し上げます。報告は次回に掲載予定です。

◇牧師不在期間の説教は、川上寧牧師(フリュッセル日本語プロテスタント教会)、シュテクレ・コー宣教師、張谷廷河兄(教会員)、矢吹博牧師(フランクフルト日本語福音キリスト教会)がご奉仕くださり、よき交わりができましたことを感謝いたします。

佐々木牧師 3月に訪問させて頂いた教会など

- 4日 小松川教会礼拝説教
  - 越谷教会夕礼拝
  - 5日 東支区教師会
  - 6日 日本同盟キリスト教団
  - 川奈聖書教会 火曜礼拝
  - 8日 志木教会祈禱会
  - 11日 京都復興教会礼拝説教
  - 15日 東京新生教会祈禱会
  - 井草教会祈禱会
  - 18日 三崎町教会礼拝説教
  - 21日 魚津教会祈禱会
  - 25日 喬木教会礼拝説教
  - 26日 日本基督教団世界宣教委員会訪問
  - 27日 東調布教会訪問
  - 28日 洗足教会祈禱会
- 今年も多くの教会で温かく迎えて頂きありがとうございました。

◇ 予 告 ◇

◇イースター日独語礼拝&祝会

日時 四月一日(日) 礼拝一四時

◇ペンテコステ日独語礼拝&祝会

日時 五月二〇日(日) 礼拝一四時

◇野外礼拝

日時 六月一〇日(日) 一二時 広島長崎公園

《礼拝》

主日礼拝 毎週日曜日・一四時

大人と子どもの合同賛美礼拝 第四日曜日・一四時

子どもの礼拝 第二日曜日・一二時半

《定例集會》

聖書を学ぶ会 第一・第三火曜日・一〇時 牧師宅

聖書を学ぶ会・入門編

第二・第四木曜日・一四時 牧師宅

ケルン集會 第二木曜日・一一時

シムミット姉宅

メアプッシュ集會 月一回 藤井兄・姉宅

※日時はお問合せください

発行:ケルン・ボン日本語キリスト教会役員会  
**Japanische Evangelische Gemeinde**  
**Köln-Bonn e.V.**

<主日公同礼拝>

会場: Dietrich-Bonhoeffer-Kirche  
 住所: An der Decksteiner Mühle 1  
 50935 Köln (Lindenthal), Germany  
 電話: 0221-4300319 (礼拝前後のみ)  
 時刻: 毎週日曜日 14:00-15:00

<牧師> 佐々木良子 (Pfr. Ryoko SASAKI)  
 牧師館: Breslauer Str. 26, 50858 Köln  
 固定電話: 02234-9298792  
 携帯電話: 0151-2910 6278  
 Email: r310130s@yahoo.co.jp

<ホームページ>

http://koelnbonn.jp

<振込口座>

IBAN: DE97 3601 0043 0587 6034 38  
 BIC: PBNKDEFF